

平成21年度 第1回島根県社会教育委員の会

日時：平成21年7月16日（木）

13：30～15：30

場所：サンラポーむらくも 祥雲の間

- 1 開 会
- 2 教育長挨拶（藤原教育長）
- 3 出席者紹介（安達S L）
- 4 事業説明
 - ・ これからの生涯学習推進センターの機能について（大矢課長） 資料①
 - ・ 「ふるさと島根」子ども交流の旅事業について（佐々木G L） 資料②
 - ・ 県内公民館の運営状況及び活動について（山本社会教育主事） 資料③
- 5 事例紹介（雲南市加茂公民館 浜田市立井野公民館） 資料④
- 6 意見交換

○有馬委員 以上で事業説明が終わったわけでごさいます、これから後、委員の皆様方の意見をちょうだいし、意見交換をする時間、ざっと1時間あるんじゃないかなと思っております。

今、事業説明いただきましたように、公民館活動が中心になります。「地域力」醸成プログラムの取り組みの今年で3年目ですけども、その事例も含めて発表いただきましたので、この意見交換は主として公民館をキーワードにして御意見がいただけたらと思っております。ただ、先ほどまでいろいろ事業説明が続きましたので、説明や発表をお聞きになって、御質問や御意見が浮かんだ方は、今お話しただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

○横山委員 2番目の「ふるさと島根」子ども交流の旅事業についてですが、平成17年度から「ふるさと教育」に取り組んできた中で、子どもたちは自分の住んでいる地域・地元について自分の目で見、体験し体感してよくわかるようになり、地域の方たちとの交流も深めることができるようになってきました。ただ、同じ島根でも東部と西部では距離的にも随分離れていることもあり、地図や資料では知っていても、行ったことも見たことも

ないという子どもたちが結構おりました、4年生とか5年生とかになったら、ふるさとというものの視野を、もっと広げていかないといけないんじゃないだろうかと思っていました。そんなふうに思っていましたところへ、「ふるさと島根」子ども交流の旅事業の説明がありまして、これは私たち教育現場で思っているとおりのことだなと感じました。やはり住んでいるところが一番ではあるけれども、次の段階として、ふるさとの視野を広げていく事業として大変ありがたいことだなと思いました。

○有馬委員 これまで県教委がやってこられました「ふるさと教育」と、それからこれから始まる「子ども交流」との関連の御意見でもあるわけだし、発展の御意見でもあるわけです。何かこの辺で関連して御意見ございますか。

○坂本委員 先ほどの公民館の取り組みの中でも子どもの参画という言葉が出ておりました。参加よりも参画というのは、私たちが子どもの活動をしておりまして大変感じております。子どもたちは大変忙しいのですが、今回の企画は3年間ありますので、ぜひ1年目に参加された子どもさんを中心に、2年目、3年目の企画立案に参画させていただけるといいと思います。全県長いので集まることは難しいですが、インターネットを使うなどして子どもたちの意見を把握して、ぜひ子どもたちに力をつけてほしいと思います。きっと3年目には子どもたちが、島根ってこんないいところなんだという、観光パンフができるのでは、と期待しておりますので、よろしくお願いいたします。

○福間委員 井野公民館の篠原さん、人口がだんだん減る、高齢化してくる、それから中学生は出ていくということをおっしゃるが、中学生は「山菜セミナー」には参加しておりませんか。

○篠原井野公民館主事 全く参加していないというわけではありませんが、中学生になると部活動とか、日曜日に開催する事業でも学校活動を優先して、なかなか地域の事業に参加することが難しい状況がございます。小学校を卒業して中学校に入学したての子どもたちは、部活がまだ決まっていない状況もあって、数名は参加してくれる年もありますが、中学生になると、地域の事業に参加するというのは難しい状況が見られます。

○福間委員 そこが僕は大事なことだと。「ふるさと教育」も絡んでくるんですが、私はずっと前から学校にお願いをして、地域でやるときは、例えば町民体育大会とか、あるいは敬老の日とか、そういう時には中学生を必ず地元へ返してくれと。で、体験学習をやらせる。そのぐらいやって、子どもの時に地域というものを心の中へ、頭の中へしっかりとすり込んでおく。そういうことをおやりになると、決して井野は廃れませんよ。

○篠原井野公民館主事　そういう努力は地域住民がしていると思います。井野公民館は中学校の建物を使っているんですが、その中学校の建物は地域の住民の方が土地を提供され、建築資材も住民の山から運び出されて、労力奉仕されてでき上がった建物が、一部を残してそのまま保存して公民館となっています。地域的には教育にすごく、戦後の敗戦間もない時期から熱心な地域であると思います。そういう土地柄もあって「ふるさと教育」であるとか子どもに対してとか、今、「学校支援地域本部事業」とか行われていますが、こちらから働きかけなくても地域の住民の方は「学校から要請があれば、さあ協力しますよ」という意識は十分持っていらっしゃる。そういう土地柄だと私は誇りに思っております。

ですが、そういう努力をしてもなおかつ過疎化はとめられなくて、残っている子どもたちが、教育を終えて都会に出ていくのは避けられない現実がございます。その時に、山の中だからという自己嫌悪みたいなものは持ってほしくない。自分のふるさとには何もないけれど、どこにも取れないような山菜があるわけではないけれど、山菜をツールとした人との交流があるとか、井野でしかできない交流があるんだよ、というふるさとづくりを目指したいと思っております。今さっきおっしゃったように、学校にも呼びかけて、年度末にはひとり暮らしの高齢者の方とのもちつき交流会などもしております。そこには小学生は全校児童、先生も一緒に協力してくださっていますし、中学生も可能な子どもたちは手伝いに来て、受付などの事務とか手伝いもしてくれています。

○福間委員　それを承って大変心強くなりました。中学生になると広域で集まってきますから、いわゆる村単位、町単位のことのできかねるようになりますけれども、やはりそこは学校との話し合いで、その地域から出ておる子どもたちは一定の日には返してくれと、そして地域活動に参加させる。そういうことが地域を寂れさせないもとなると思います。ですから、この近くでも中学生、高校生までも呼びかけて、地域で活動させておる地域がだんだん増えてきておりますね。ですから悲観しないで、子どもたちがいつかは出て、また帰ってくるようなことをやりましょう。

○有馬委員　坂本委員からは子どもの参画の御意見、特に福間委員は中学生、高校生もでしょうけれども、地域活動にできるだけ加わる、参画するという御意見が出ました。このことは恐らくどこの地域でも大事なテーマ、課題ではないかと思われまいます。この件に関して、こんなふうやってるところがあるとか、こんなふうやってはどうかとかありますか。

○若菜委員　私も実は井野出身でございます、井野中学校の卒業生であります。940名の中の一住民でありますけれども、今、篠原さんが言われましたように、とても住民が

協力し合って、子どもたちに勉強の場ということで井野中学校というのができ上がったと私の祖父母等から伝わってきております。井野は4つの小学校で井野中でした。分校がありまして、井野小学校が本校で、あと分校が3つありました。今、室谷分校だけが一つ残っておりますけれど、本当に過疎化が篠原さんが言っているように進んでいます。

山菜教室の時の中学生についてですけれども、いろいろな大会がある時期でもありまして、参加がなかなか。地域へ戻ってこれないという事情もあるのではないかと考えております。また、小学校の協力、小学生の参加はあると私は把握しております。

私自身、問題を抱える子どもの自立支援事業の連絡指導員を現在させていただいております。その中で、引きこもりのお子さんがおられます。地域には教職についていらっしゃる方やいろいろな経験をされた方がおられます。今後、公民館が引きこもり等で悩みを抱えている子どもさんの居場所として、公民館と協力、連携をとりながら、また、各市町村の支所とも連携をとり、情報提供しながら公民館を利用させていただきたいと思っております。

○福間委員 できるだけ使ってやってください。

○仲野委員 先ほどの子ども交流の旅の事業のことを少し違う視点から意見を述べさせてもらいたいんです。社会教育事業として、最近は、大分変わってきたかなと思いつつも、今回も子どもたちだけの対象の事業ということで、果たしてこれでいいのかなという疑問を思っているんです。今、30代、40代の親御さんが本当にふるさとを知ってるんだろうか、本当にふるさとを子どもに伝えられるんだろうかと考えた時に、果たして子どもだけ交流をしてもいいんだろうかと。やっぱり親子でやる体験の良さを社会教育としては打ち出した方がいいんじゃないかと思うんです。ですから、そういう意味では、100人の子どもより50組の親子が移動した方が、親同士のつながりとか、子どもと親との関係とか、そういうことによる社会教育的な教育作用が起きるんじゃないかなと思っております。これが帰ってきても家庭の中での親子の会話にもつながっていくし、また、親同士のネットワークができるかもしれない。そういう意味で、せつかく宿泊を伴うような活動でしたら、そういう点も視野に入れて検討してもらえなと思っております。子どもだけじゃなくて、親子も考えていただきたいと思っております。

○有馬委員 100人の子どもより50組の親子という、御提言がありました。非常に貴重な意見だと思いますが、またそれらの御意見も取り入れた新しい事業を今後お考えいただけるかと思っております。

○栗栖委員 この「ふるさと島根」子ども交流の旅事業だけではないんですけれども、島根県がしてきた「ふるさと教育」に関して、中学校における「ふるさと教育」に関する議論が非常に足りないと思っています。その結果、参加対象が児童生徒ということで、参加する中学生も児童も同じ、同列のモチベーションでの広報をするんじゃないかなと思っています。さっき学校が地域に、中学生が参加できるように、参加させるようにしてください、という動きが必要だと、まず最初はそうだと思うんですけど、やはり小学校時代の「ふるさと教育」を通して、中学生は自らの意思で、ふるさとを楽しむ意思を育てて、その中学生が地域で何かをする。小学校における「ふるさと教育」の評価の一つは、中学校になった自分たちで、自分たちのふるさとで楽しもうという意思が育っているかというところを評価にしていけないといけないのではないかなと思っています。

井野とかを見ていて、私が住んでいる浜田の中心市街地は、歩いていけるところでそういう豊かなところがないので、しょうがなく放課後遊び隊という形で中学生と小学生が遊ぶというのをしております。それを一つの「ふるさと教育」とし意思が育つかといえば、小学校時代に中学生の人と思いきり遊んでもらった楽しい体験はやがて、自分も中学校になったら遊び隊のお兄さんやお姉さんになりたいという意思を育てていると私は思っています。「ふるさと教育」で小・中で本当にそういう意思が育っていくか、させられる義務の「ふるさと教育」ではなくて、自らが本当にふるさとを大事にしたり楽しもうという意思ある一市民になっていくかということに焦点を当てていかないと非常に難しいかなと。そういう意味で、私は県の交流事業はもう1回見直していただきたい、これだけではわかりませんが、まだまだトップダウンという印象を持って聞かせていただきました。

○有馬委員 さっきの仲野委員とまた違った要望、意見ではありますが、要するによそのふるさとよりも足元のふるさとの方をもっと大事にしろという、簡潔に言えばそういうことですかね。

○栗栖委員 それだけじゃない。中学校の「ふるさと教育」という議論が非常に少ない。キャリア教育とイコールという形で、学校の中でも総合的な学習でのキャリア教育とか職場体験とかいうところで、非常にまだまだいろんなことの議論が足りないという気はしております。そんな中で小・中、同じようなプログラムをただおろしてくるというのは、やっぱりそこと同じものを感じるということですので。

○有馬委員 中学校の「ふるさと教育」がどっちかというところと総合的な学習と絡んでいる点があって、キャリア教育風、職業教育風な活動が目立つというところはあるかもしれません。

そういったところから見直す、反省するべき点があると思います。

○横山委員 「ふるさと教育」というのは広いと思うんです。中学校ではキャリア教育的な視点からではあるけれども、そこでまたふるさとを見ていると思うんです。今、小中一貫教育が叫ばれておりますが、私の勤務する中学校区でも「小・中を通した総合的な学習、あるいはふるさと教育の系統性のようなものをもう1回見直し、考えていこう」と話し合っているところです。中学校では、今おっしゃったキャリア教育というところに行くかもしれない。中学校だけ見るとそうかもしれませんが、小学校でやった「ふるさと教育」がもとになりながら、中学校ではそこを通過して、大人になった時にはきっとふるさとに愛着を持って総合的に見る力になっていくと思います。

○有馬委員 佃委員に聞きたいんだけど、今、「ふるさと教育」を三、四年やってきて一種の評価のようなところも出てきておるわけですけど、佃委員は多分総合的に見てきておられますが、どうですか。

○佃委員 私は、海士町、隠岐の島ですけども、教育委員会に勤めておりますが、一言で言うと、地域のことをそれぞれの発達段階に応じて、自分でおらが村を、おらが町を語る子どもをつくる、これに尽きるかなと、思っています。そのために、海士町では、4月当初、教育委員会と各学校との交流事業をやっています。今年、後鳥羽上皇崩御から770年、祀ってある隠岐神社ができてから70年ということで、後鳥羽上皇にかかわる研修をまず教育委員会と学校でやろうとあって、崎という後鳥羽上皇が流れ着いたところで、その地域の方に、2時間ぐらい説明をしていただきました。驚きました。違う島から学校に通っている教員、地元にいる教員、その崎というところに足を運んだことのない教員が多かったということ。皆さんの地域は、指導する教員が地域を熟知しているかもしれませんが。先ほど若い親世代ということも言われましたけれど、指導者のもっと力量を高めるといふか、いかにそういうかわり、子どもとともに、あるいは地域とともに学ぶ方法、方策を探るといふことかもしれません。海士町、岡山県、後鳥羽上皇の関係では、井原市との交流は隔年行ったり来たりしております。鳥羽踊りというのがあって、その鳥羽踊りを隠岐神社に奉納したことがきっかけで、10年ぐらい前から交流が始まっている。

それから、「ふるさと教育」についてですが、中学1年生では地元のことを調べて、それを2年生の修学旅行、東京に行っていますが、その東京に行ったときに、17年から一橋大学で3年間、今年2年目になりますが東京大学でふるさとを学生の前で語るということもやっております。そして今年から「学校支援地域本部」が立ち上がりまして、今、取

り組みつつあることは、ふるさと検定をつくろうと。いわゆるふるさとにかかわる問題をあらゆる年齢層から募集をして、そしてその問題を老いも若きも答える。その答えた数によって何級という形をつくろうとして、第1回目、11月の産業文化祭の時にやろうと。今、その問題作成中です。

いろいろなことはやっていますが、何かもっと意識改革だとか、指導者だとか、いろいろな人とのめぐり合わせをいかにつくっていくか。あるいは子どもが非常に海士も少ないですので、個人的に集団が一つのキーワードだと。いかに異年齢あるいは同年齢、隣の生徒とかかわる、そういう集団でかかわらせながら育てていくかということかもしれないと、思っています。

○有馬委員 中島先生、中学校の立場で「ふるさと教育」のとらえ方があります。小と中もごらんになって。

○中島委員 中学校も「ふるさと教育」取り組んでおります。私も全県下がわかるというわけではございませんが、例えば本校ですと、一つには、地域の方を講師に入れての米づくり、稲作体験、これを学校で取り組んでおります。それから、地域の方のボランティア、福祉活動への参加ということもやっておりますし、それから、先ほどお話出ましたキャリア教育、これはもう当然取り組むべきものということで、3年生がこれに取り組んでおります。先ほど横山先生から話がありましたように、小学校は生活科いう、身近な生活に基づいて、また総合的な学習があつて、そこへ「ふるさと教育」を、段階的に行う面もあります。中学校は小学校の活動に基づいてというところが、若干つながりが、小中一貫という面が、先ほど話がありました薄いかなという面はございますが、「ふるさと教育」には取り組んでおると思います。

ちょっと違った意見だと思えます。私、初めてこの会に出させていただきました。先ほど県からの、直接的な学習機会の提供から、社会活動を支援する人材育成という話が出ました。これと、先ほど話が出ている公民館でのさまざまな活動や、井野の取り組み等を聞いておまして、根底のところは共通するものがあるなと思えます。それは、私が最近気になるというか考えております社会教育力、これが非常に薄れてきたというか、なくなってきたという面があつて、学校も、以前はそれがあつた関係で、子どもを教育するのに非常に楽、楽と言うとちょっと語弊がありますが、そこまで力入れなくても子どももできとつたなど。ところが、そちらの方が薄くなって行って、これは今の時代では仕方がないかなとも思いますが、学校としても力をそちらへとられるというか、頑張っていくという面が

ございます。

私は平成5、6、7年に三隅中学校におりまして、井野中学校へは何回も、仕事じゃなくても行きました。今でも覚えておりますが、学校の近くへ行きましたら、女の子が2人、ちょうど帰る時でして、私は全く知らない人間です。向こうから「ただいま帰りました」と。「ただいま」じゃないんですね。「ただいま帰りました」というあいさつをしました。昔の子どもというのは帰る時に「ただいま帰りました」と言う、道路です、家じゃなくて道路ですれ違ったときにそういうあいさつをした。井野の生徒のその言葉を平成何年に聞いた時、私の子ども時代を思い出して、同じあいさつをする子がここにはおると、本当びっくりしました。今もじゃないかなと思います、そういう社会教育力は、保たねばならないというものはぜひ地域で育てていくということが大事になってくるんじゃないかなと。そのためには、先ほどから話が出ております、いろんなイベントも、いろんな問題がありますが、そこで交流とか、そこで頑張る、子どもが触れ合うだけでも育ていく要素がたくさんあると思いますので、福間委員、うちは子どもが、花火大会、祭りがありますが、ここへ出させて、いろんな準備とか、司会とか、それから夏祭りの店を出したところへ手伝うとか、うちだけじゃないですが、中学校も取り組んでおりますので、また御理解いただきたいと思います。

○有馬委員 中島委員さんが社会教育力とおっしゃってたのは、地域で育つ力というか、そういう意味だと思うんです。

○松本委員 私は、公民館のこれにはずっと3年間かかわってきて、選考委員をさせられて、加茂（公民館）の基常（主事）さん、済みませんでした、昨年度落としまして。どきっとしたんですよ、見た時。嫌みだなという。それはともかく、すごく立派になってて、関心しました。

○有馬委員 御存知と思いますが、地域力醸成プログラムの審査委員をしておられます。

○松本委員 今年のプレゼンもあったんですけども、子育て支援枠が2つになってるんですけど、見ていただくとほとんど子育て支援に関係あるのばかりなんです。地域で一生懸命子どもをどう巻き込んでるかという、ほとんど全部そうなんです。子どもをどう取り込んでふるさとのことを知ってもらおうかというのでやっておられて、その視点がまずあるんですね。公民館のプレゼンの各取り組みの中に。3年間大体そうでした。ということは、地域は地域で頑張っていらっしゃる。もう一つ、今度の交流ですか、これはまた一つのツールとしていいんじゃないかなと、こういうやり方は。いろいろな取り組みをやって、

そこの中で全体にボトムアップしていけばいいのかなと。とにかくこの（地域力醸成プログラムの）プレゼン、すごい熱気なんです。県庁の講堂が超満員になって、追加のいすを出すぐらい、ものすごい熱気です。県内各地から関係者が集まってきて、よその公民館はどんなことをやっているのか必死で学んで。地域に生かすものがあるのか、という感じでやっていらっしゃいます。そういうことで、これはぜひとも続けてもらいたいですし、いろんな取り組みで、それでやってみて、少しずつレベルアップをしていけばいいのじゃないかなという気がしています。

長くなって申しわけないですけど、この場所かな、有馬先生もおられたんですけども、（松江）北高で1年生に出前授業をやってるんです、私。1年生200人ぐらいに出前授業をしたら、隠岐出身の子がおったんですよ。その子は隠岐が嫌で嫌でたまらなくて、もう早く出て、松江へ出たかったと。それで僕が、そのとき世界遺産の話をしたんですよ。石見銀山の話だけ。隠岐のことは一言も言ってないんですよ。だけども、最後、感想文を書いてくれた時に、「私は隠岐に帰りたくなかった。一度大学へ行くけども、必ず隠岐へ帰って情報発信する。地元の良さを自分が知って情報発信するような仕事につきたい」と書いてきてくれて、すごく嬉しかったんですね。ですから、翻ってこういうようなよそへ行って交流するのもありかなと、もちろんあると。いろんなツールでとにかく子どもに目を向ける、それが大事でないかなと気がしています。

○前島委員 県社会教育委員連絡協議会理事をやっております前島ですが、この間、ホーランエンヤがありました。ホーランエンヤのとき踊った大井（地区）は高校生、馬潟（地区）は中学生、一生懸命子どもたちが踊る。そして、私は出雲郷ですからホームグラウンドですが、川の岸から声をかけるんですよ。「大井、よかったぞ」「矢田（地区）、よかったぞ」と声をかける。すると、その度に総代さんは頭を下げて「ありがとう、ありがとう」と言う。子どもたちが一生懸命に踊る姿を見て、私どものいろいろなことで会をするメンバーの女性の方も男性の方も、ぼろぼろ泣けたというんですね。感動して。「前島さん、本当に嬉しくて泣けたのよね」と言うんだよね。私は「それが大和心だよ、日本人の心を揺さぶったんだよ」と話をしたんです。私は、福岡委員もおっしゃったのですが、公民館活動の中にそういった中学生、高校生をどう織り込んでいくかということは今後非常に大事なことだと思うんです。

それと、地域の事業の中で、子どもたちのポジションを大人が省いてしまってるんですよ。本当は今まで、例えば左義長のときの、これは子どもがやるものであるというのを親

が出てやってしまう。子どもたちは勉強しなきゃいけない。2時間、3時間の時間です。そんなもの、無駄な時間を省いたらいくらでもできるじゃないですか。親たちがせせり出て、子どものそういうポジションを取り上げていった。それが今日の子どもたちのふるさとを思わない心を育てた。

それともう一つは、仲野先生がおっしゃったのですが、親と子どもがセットでどう勉強するかということがないと。ふるさとのわからない親が、その子どもに「ふるさとを知れ、ふるさとを知れ」と言ったって、これはどだい難しい話じゃないかと思うんです。

私どもも町社会教育委員として公民館にいろんな形でかかわっていったんですけども、非常に深いかかわりを持っている委員と全然かかわりを持ってない委員、いろいろ社会教育委員がいます。これからの地域の中でどう若い人たちを織り込んでいくか、ということは、これは社会教育委員も一生懸命になって学校とやっではいるが、学社融合と言われたんですが、なかなかできてない。そういう中で、どう今後取り組んでいくかということは、学校と地域と、我々がそのキーパーソンとして調整をやっていく必要があるんだろうと、今日いろいろな話を聞きながら思いました。これからそういった子たちにどう舞台をつかってやるかということは、非常に大事な事じゃないかと思えます。

○有馬委員 地元で子どもの、あるいは若い者のポジションを我々は与えてなくて、奪い取ってるんじゃないかということですかね。それともう一つがやっぱり親と子がセットという言葉が出てきましたけども、仲野先生以降、そういう意見も出ております。

○栗栖委員 今言ってくださったことがほとんどだと思えますけれど、教育ってインプットしていく部分も必要ですけど、アウトプットすることでもっと力がつくところでは、中学生、物すごくいい力、もうすごく持ってます。何か大人が教えてあげる、みたいな目線がまだまだ多くて。地域を本当に元気にする主役は中学年代なんじゃないかというぐらい、本当はものすごくいい力を持っている。そこが非常に何かまだ足りない。そこをやっていくのがこれからの「ふるさと教育」の大きな課題かなと思っております。

○有馬委員 大人が育ててやるというんじゃなくて、育つ機会をもっとつくってやるということが大事だという趣旨ですね。それでは、大分公民館のことも出てまいりました。公民館が地域で子どもを育てていく上でも、地域がまとまっていく上でも、子どもたちが育つ土壌をつくっていく上でも重要な役割を果たしていることは言うまでもないことでございますけれども、そういった公民館に対して、今、皆さん、何か提言でもあったり、御意見でもあれば、公民館というキーワードでもう一声二声いただけませんか。

○仲野委員 先ほどから、今年の公民館のいろいろな事業を見させていただいてもそうなんですけれども、やはり地域の子どもたちをどう育てていくか、地域のきずなをどう高めていくかとか、そういう活動として取り組んでいらっしゃるな、というのがよくわかって、これはこれですごくいいことじゃないかなと思っております。

今、その地域に生きている、生活している人たちのより豊かな生活とか、また問題解決するためにいろいろな公民館が力を出していること、それは先ほど申しましたようにいいことだと思うのですけれども、もう1点、例えば井野、先ほど高齢化率が48%と言ったけれども、そうすると5年後にはもう50%を超すんですよね。その後どんどん高齢化していきますので、若い人たちがそこに住まない限りは、今よく言う限界集落にどんどん近づいていく。そういう中で、じゃあ地域の将来をどうするかという部分に、地域住民の主体的な活動を支える公民館を考えていただきたい。公民館力醸成の中で、今生きてる人たちプラス、もう一つその先、子どもたちが生きる地域をどうつくっていくかという部分にも公民館の力を出していただきたいと思っております。そうしないと地域がなくなってしまうんじゃないかと、非常に今住んでいる人が不安を持ってるんじゃないかなと思うんです。外へ出てから帰ってくるとしても、帰ってきて仕事が無ければ絶対に住みつかないし、そこに大型団地でもできない限りは人口も増えない。どういう地域をつくり上げていくのか、という住民の方々の課題意識を高めていく公民館活動もぜひ今後加えていただきたいと願うところです。子どもたちが一番大事ですけど、その子どもたちが帰ってくるふるさとなければ意味がないので、長期的戦略を公民館が持っていただきたいと思っております。

○有馬委員 今、県教委は「地域力」というキーワードで「地域力醸成プログラム」とおっしゃってる。その事業の趣旨の中にも多分仲野先生がおっしゃってることが含まれてるんじゃないかなと思われまして、仲野先生のおっしゃってる言葉の中に、公民館力の将来というか、これからの公民館力という言葉が出てきましたけれども、非常に大事なことだと思われまして。

○福間委員 教育長、あなたが、実証！「地域力」醸成プログラム、これをつくりました。これがどれだけ効果をあらわしているかということの一つ申し上げますと、平成8年に松江で全国公民館研究集会をやったんですよ。その時に、全県下に御協力を仰いでやらなきゃいけませんから、評議員会をやって協力を仰いだんですね。ところが実際、戦力として参加していただいたのは、ゼロ。松江だけで人的なものは出してやりましたが、一生懸命燃えてくれまして、参加者3,121名という記録がまだ残っております。それが、この

間の松本座長のプレゼンテーション、石見部の方が余計燃えていただいたんですね。これが嬉しかったんですよ。9月の3、4日、徳島で中四国の研究集会がございます。そこへ島根からは200名を超える人が参加して勉強しようという意欲を持っているんです。こういうことができるようになったのは、やはりこの事業のおかげと私は思っております。

それともう一つ、ちょっと自慢になりますが、山本社会教育主事と一緒に徳島へ打ち合わせに行きまして、某県がある課題発表について「これは本県ではようできませんので、どこかとってくれ」ということをございまして。あまり早目に手を挙げるのも安っぽいので、大分こらえていましたが、こらえ切れなくなって、「よし、その課題は島根で持ちましょう。そのかわり一つ減らしなさい」と言ったら、隣の山本さんが、「そんなことを今さら言ったって、発表がすでに決まっている2人はもうやる気で一生懸命準備している。今さら結構です、とは言えません」と言うから、それなら3つやろう、ということで受けて帰りまして。本当は私がやるつもりでしたわ。あの時期になって、もう新しく誰かにやれというのも無理だと思いましたが。ところが、私の公民館へ帰ってふと目の前を見ましたら、26歳の青年職員が、これも社教主事講習を終えているんですよ。「お前は俺よりも資格が上だから、おまえやれ」って言いまして、「はい、やりましょう」って言ったんですね。やはり教育長、教育です。公民館の職員教育は、仲野先生、高岡先生に始めていただいた、島大から始まっています。それから、社教主事講習が平成14年からですか、始まりまして。だから随分職員の質が上がってきておる。だから26歳の青年が「やりましょう」って軽く言ったんですよ。それを聞いた同い年ぐらいの他の公民館の職員が、「あいつがやるなら僕もやってみたい」と言ったそうですわ。というように、地域を動かしていくためには、やっぱり教育ですね。ということが申し上げたかった。だから、まさか教育長、あなた、今年で3年たったから「もうやめた」なんてことはありませんね。

○有馬委員 島根の公民館力が誇れるものを持っているというお話だったと思います。

増田委員さん、今、石見の方の公民館も非常に意欲的というか、熱気を感じるという話もちよつと出ておりましたけど、増田委員さんから見られた公民館の様子というか感じ、どう思っておられますか。

○増田委員 津和野町から参りました。津和野町は旧日原町と合併して、継続審議であった館長を今年4月から、館長は旧津和野町は職員だったんですけど、それを非常勤の民間にするというのに踏み切って、全町スタートしました。

私に関係している公民館の例を言いますと、私も町の社会教育委員をやっております、

社会教育委員は公民館の審議委員になるということで、かなり関係を持ってるんですけど、スタートしましたら、今までとちょっと違っていると思うのは、民間の人が出ましたので、その人自身もすごく不安だし、これができますという自信がないというところからスタートしました。そうすると、地域の人がみんなで助けて支えてあげないといけないというところがすごく見えて、周りに花を植えたりとか、頼まれもしないのに出ていくとか、公民館長は大体週に3日出勤でいいはずなんですけれど、その人は慣れないからと言いながら、毎日出かけているんです。今までやっていた活動が縮小になったかというところ、全然そんなことはなくて。今年は旧町内で2カ所、通学合宿を、7年目になるんですけど、6月の終わりから4泊5日と、私が関係している小川公民館は3泊4日で津和野小学校区でやりましたけど、もらい風呂とかあるんですけど、以前よりも手伝ってくださる方がすごく増えました。

もう一つ私が関係している「学校支援地域本部事業」も、小、中のコーディネーターをしてるんですけど、その関係で、公民館長さんを含めた活動をしていった方がいいなと私は思っていて、公民館長さんの勤務時間でも、教育委員会に「いいですね」といって言いながら、活動の一環として、学校の例えば1年とか2年の町探検の時の見守りとか、安全のボランティアとかに積極的に出ていただいたりとか、そういうふうに関わり込んでいます。館長さんも、今まであまり表に出なかった方もいるんですけど、どんどん出てもらって、子どもたちと知り合いになってほしいと思っております。通学合宿を両方見たところ、とても素晴らしい。反省会を2日前にしたんですけど、地域の人たちが十五、六人ぐらい出る反省会でした。館長さんももちろん出ておられて。公民館に関しては、ちょっと不安なスタートではありましたが、この調子でいくと、みんなを巻き込んでいけて、いいのかなという気がします。

一言いいですか。中学校の子どもたちと私たちもいろいろな活動を一緒にやっていきたいというのがすごくあるんです。この間、津和野中学校では「ふるさと教育」で、総合なんですけれど、1年生は郷土料理を切り口にしてふるさとを知ろうという学習を毎年して、今年2年目になります。その時、津和野町では有名な芋煮とか、その芋煮のお芋をどうするかということ、今、東京でも篠山の芋ということでブランド化されたりして、流通のこととか、そういう方面につながっている学習にして。これをもとにした調理実習とか、調理師さんに来てもらって。あと食育の関係で活動していらっしゃる方たちを講師にお話を聞いたりしました。この間も1年生の1時間の授業に行ってきたんですけど、一

緒に参加させてもらったりして勉強しています。3年生は福祉体験ということで、講師の先生をコーディネーターとしてたんですが、中学生って本当に大人と同じ、大人が見くびってはいけないなとすごく感じました。授業と一緒に outsizing させていただいて。というのが、老人保健施設の話と、もう一つは町の保健師さんのお話を児童福祉の立場から聞かせてもらった授業だったんですけど、本当に熱心に聞いていて。その雰囲気ですけど、小学校の時に「ふるさと教育」をしてきて、つながってきて。私としては、中学校って何かぼつぼつに切れてるなっていう印象を持ってたんですけども、やはりそれは切れてなくて、ただ表現の仕方とか少し中学生になると変わるのかなという感想です。毎年やっている、社協のサマーボランティアスクールが中学生対象であるんですけど、これは10年以上やっているといます。それに参加する子どもさんの親御さんから、「いつか増田さんに連れていってもらった小学校の時の子ども教室で、一緒にボランティアで行ったデイサービスのときの印象がすごく残ってて、今度サマーボランティアスクールに行くのをすごく楽しみにしてるんですよ」というお声を聞いたんです。会った時にそんなに小学生の子どもらしく言わないんですけど、何かそういう熱いものを持っている、切れてはいないなというのをすごく実感して、嬉しく思いました。そんな感じで、小と中と考えてというか、うまくつなげていく「ふるさと教育」のシステム、流れという課題は少し持っているということをお伝えして、お話しさせていただきました。

○有馬委員 つながっていると同時に、またもう少しつなげてほしいということかもしれないけど。

○狩野委員 幼稚園代表で出かけさせていただいておりますので、子育て支援と公民館という視点でお話をさせていただきたいと思います。

最近、幼稚園に通ってきている子どもの保護者の方の状況を見ますと、どのように子育てをしてよいかわからず、悩んでおられる方がたくさんいらっしゃいます。随分前から過保護、過干渉という言葉がありますけれども、それに加えて、親が自分の感情で子どもを育てる、という傾向もあります。幼稚園の役割としては、こうした状況の中で、親を育てる、子育てを支援していくというのが幼稚園のすごく大きな、今、役割だなと思います。幼稚園だけではもちろんできませんで、もちろん家庭の協力、そして今、地域のお力、特に公民館の支えがすごく必要だなということを感じております。今、私が勤務している地域の公民館の例で言いますと、乳幼児学級がありまして、とても活発に、乳幼児学級が核になって、地域の子育てをしていただいております。その乳幼児学級に通ってこられる親

子さんは、毎月あるんですけれども、その中でいろんなことを学ばれます。基本的な生活習慣とか、集団の中でのマナーとか、人とのかかわり、楽しい遊びの中にもそういったことをきちっと学ばれて、そういった学級を卒業してうちに入園してこられる親子さんは、入園された時からいろいろなマナーが身につけていて、とてもいいなと感じています。そういった親子さんが、そういう学級に通っておられない親子にとって、いいモデルになっていくといいなと私も保護者に伝えているところです。

もう1点、乳幼児学級の中ですごくいいなと思いますのは、つい昨日、保護者の方から聞いたお話なんですけれども、学級の中で親同士のつながりができて、よその子どもが何かいけないことをした時に、叱るということがあったそうです。自分が幾ら言っても聞かないんだけど、一緒に通ってる保護者さんが言われたら、子どもがはっとして、きちっと言うことを聞いたということです。今頃よそのお子さんを叱るということが本当になくなってきていますが、こうした公民館活動の中で親同士もつながっていくことは、とても大切なことだと痛感しました。公民館で、今、子育て支援ということをどこも一生懸命していらっしゃる。さらにこれからも力を入れていただいて、また私たち幼稚園の方でもつなげていって、より良い子育て支援ができるといいかなと思っています。

○有馬委員 親の子育て力というのはほっといても育たないみたいな、普通の生活では育つような体制にどうも現在は無いようで、いろいろなところで子育て力を補足的に養成していかななくてはいけない、というのが現状では、と思います。

○堀川委員 つくづく島根県の公民館力は大きなものだと思って聞かせていただきました。残念ながら図書館力はそれほどでもない。公民館には図書室が必ずありますので、どのようになっているかな、嫌みじゃないですけども、他県で公民館の図書室を全部整備したところがあります。そうすると、その地域の人たちが、じゃあ公民館じゃなくて図書館と呼んでほしいという県もあります。島根県は公民館力がすごいのですが、県が標榜している「子ども読書県しまね」を公民館の力でもって全県に広げることができないかな、と今日ずっと思いながら聞かせていただいております。例えば公民館で読書座談会をするとか、親子読書郵便をするとか、子どもが親に「こういう本がおもしろいよ」って勧めて何か書くとか、コンクールでもありませんけれど、そうした仕掛けを公民館を通して全県に広げることができないかなと思っておりました。

先ほど佃委員さんが、修学旅行に行った時に、一橋大学とか東大で発表しているというふるさとについて、やはりそれは「ふるさと教育」の中でも調べるという、情報を使う力

を育成していると思うんです。今まではあまりそういうことは言われてこなかったと思うんです。「ふるさと教育」というと、イコール体験ということが前提にあったように感じておりましたけれど、やはりそうした中で、調べる、図書館を使う、学び方を学ぶ、情報を使う力を育成するということが少しずつ取り入れていただけたらなと思います。

○有馬委員 「ふるさと教育」の中に発信力みたいなものが含まれていることも大事ではないかと感じました。

○仲野委員 先ほども前島委員さんがおっしゃったんですけど、地域のさまざまな子どもたちの体験を大人が邪魔してるんじゃないか、役割をとってるんじゃないかということがあったんですけども、私もそういう部分もあるんじゃないかなと思いつつながら、夏とか、長期休みにいろいろな事業をやっています。公民館もやるし、私たち大学もやるし、いろいろな子どもたちの体験機会を提供しようとしてるんですが、その時に参加できない。何が原因かなど。社会体育なんですね。子どもスポーツ行事なんです。スポーツ大会とぶつかるんですよ。そうすると、一般的な地域体験、それから地域行事とかに子どもたちが出てこれない。どっちを優先するかといったら、スポーツが優先されてしまって、せっかくの地域のさまざまな体験とか自然体験とか、また親子での体験とかいうものが、できない状況にある。だから地域でのさまざまなスポーツ活動と体験事業と、どう調整していくかということを考えていかないと、これから増えないんです。この部分は、私など大学でとやかく言ってもできませんし、やはり地域全体で考えて、子どもたちのスポーツ活動も大事だけでも、地域での行事とか自然体験とかできるような仕組みづくり、活動のシェアとか、そういう機能をどこかが持っていたかしないと、多分これからもこの状態は続いていって、地域体験とか、社会体験とか、親子体験とか、そういうものができなくなってくるし、地域行事も廃れていくんだろうと思います。ぜひその点、御検討してもらえればなというお願いです。

○有馬委員 結構子どもも忙しいわけで、さっき子どもの地域でのポジションがないという話がありましたけども、参加しようとしても何かとぶつかって。都会なら塾、おけいこなんかもあるかもしれませんが。

○若菜委員 最初にありましたように、出雲で痛ましい事件がありました。日々いろいろな報道で、全国でいろいろなことが起きてるなというのを、実態というか、いろいろな家庭の中に入って痛感しております。夫婦関係の中で子どもが犠牲になったりとか、親に対して殺意を抱くとか、そういうのが多々あるようにも思っております。

私たち、県の社会教育委員という任務を受けていますけれども、地域でもいろんな役を受けていらっしゃる方がおられるかと思えます。公民館にもいろいろな方が役を持って集まれる場も多々あるかと思えます。ふっと、この家庭ちょっとおかしいなとか、子どもの様子がおかしいなとか、子どもだけではなくて、今、介護関係でも悲しい事件も起きていますので、ぜひプライバシーを一人一人守りながら、情報発信というか。例えば、ある子がひよっとしたら、と思ったら、すぐ警察、駐在所とかに、少し見回りを強化していただませんかとか。そういう役割が今、私たちにあるのではないかと思えます。偏見の目で見るのではなくて、各家庭がいつでもオープンに、昔のように話せるような状況というか、そういう地域づくりというのにも必要になってきているのではないかなと思いました。

○坂本委員 「教育しまね」45号を図書館で見せていただいて、インターネットの利用のルールとか、携帯電話のことが書いてあって、すごくいいなと思ったんです。私は親を卒業する世代ですが、携帯電話を1人しか持ってなくても、子どもの「みんな持ってるから」、その言葉に親は負けてしまいがちです。インターネットのルールづくりとか、携帯を持たせるにしても、ルールを緊急につくっていただけたらと思えます。業者の方も対応しておられますけど、それを超える知恵を子どもたちは持っていて、知らぬは親ばかりという状況もあります。先ほども仲野委員さんがおっしゃいました、親が勉強していかないといけない分野と思っております。よろしくをお願いします。

○有馬委員 それでは、教育長、今のことも含めて、全体的に。

○藤原教育長 坂本委員から紹介していただきまして、ありがとうございます。お手元に「教育しまね」と、それから教育課程審議会からの答申をもとにしたリーフレット。そして、一体道徳教育というのはどういう考え方でやってるんだということで、昨日義務教育課からレクを受けた資料をお配りしたところです。この「教育しまね」の中ではっきり書いたかどうか忘れましたが、「子どもたちと家庭で話し合っ、こういう考え方でルールをつくりましょう」ということは、実は1月の終わりに文書でも出しました。対談の中でも青少年育成部門と安全・安心をつかさどっている県の部門、それから県警本部と、これはもちろんそれぞれの市町村でも同じようなセクションがありますから、そういうところと教育委員会が一緒になって進めていきましょう、ということで考えております。まだまだ十分でない部分もあろうかと思えますが、おっしゃいましたことというのは十分意識しながらやっていく必要があろうと思っております。

それから、道徳と指導要領、読書のことについても、いろいろ今までアドバイスいただ

きました。当初予算の中で1億5,000万円という、この財政状況厳しい中でも、どこ
の学校図書館にも人がいると、鍵のかかっている図書館じゃないというのが実現できるこ
とになったということで、資料をお配りをしたところであります。

今後の方向性の前に2点整理させていただきたいんですが、1点は、今回新事業として
3年間の事業で起こしました交流の旅なんです、仲野委員おっしゃいますように、親子
の問題が大事だということは私どもも十分意識はしております。ただ、この事業でイメー
ジしたのは、平成8年ごろだったか、地域振興部でやってきた「サマー楽校」という
事業、これをいわば経済対策10分の10の国からの財源の中でぜひまたやってみたいと
いうことで、今回、予算化にこぎつけたものでありますから、おっしゃいますのはまた別
な格好で意識しながらやっていきたい。なぜこの事業の中で東西交流とか隠岐というこ
とをやるかと言いますと、これは、話も出ておりましたように、ふるさとの概念というのを、
一つは自分の校区ということに軸足を置いてほしいんだけど、それだけに限定するもの
じゃない。自分の所在する市町村の区域にも視野、考えを広げてほしい。海士町の子ども
は海士町のことだけでなく、隠岐島というのが島根の中、あるいは世界の中でどうい
う地域かということを知ること、
「ふるさと教育」の視点として必要なことだと思っ
てまして、教育関係者の皆さんにも、ふるさとの概念というのは自分の校区のことじゃない、
というメッセージをこの事業を通じて、あるいは「ふるさと教育」をやってきたことの研
究発表ということを通じて皆さんにわかってほしいな、と考えた事業であります。

二点目。一番印象深い言葉で、子どもの役割、ポジションを大人が奪ってるんじゃない
かというのは、私も最近ちょっと思っていました。別な言葉で言いますと、もっと子どもを、
先ほども中学生は思うよりもしっかりしてるという話がありましたが、少なくとも中学校、
高校生になれば、もっと一人前の扱いをしてやるということの方が、今は必要じゃないか
と思っ
てます。裏を返しますと、やんちゃで育ったといいますか、少し正統派から外れた
者がいまして、中学校、高校でちょい悪を認めてやれよと。何でもかんでも悪い芽をみ
んな摘んでしまうと免疫がつかないんですね。ちょい悪を認めて、その時に怒らなあかん
ことはしっかり怒ると。「ええか、ここまでは社会から許してもらえるが、それはここま
で。お前ら、ここまでが限度だ。」ということをしてやることによって免疫力をつける
という、そういうことが必要じゃないかなと、一人前の扱いとの裏表の関係として感じま
した。

終わりになりますが、福間委員のエールにこたえるということにも関連すると思いま

が、加茂公民館のプレゼンテーションを聞いてまして「公民館の設置及び運営に関する基準」第4条には家庭教育の機会の提供あるいは情報の提供ということが明確に書いてあるんだということが改めてわかりました。今後の公民館活動の中で、今まで取り組んできた地域力を高めるということとともに、若菜委員から話があった家庭の教育力を高めるという部分で、公民館にもう一踏ん張りやっってもらえるような、支援する体制が行政としてもとればな、と思っております。公民館の協議会と勉強させてもらいながら、考えていきたいなと思います。これは、生涯学習とか社会教育、あるいは生徒指導の部分だけじゃなくて、青少年健全育成の部分とまさしく一緒に考えていくことであります。

○大矢課長 今日の主題が「地域力」醸成事業のこの3年間の事業を今後どう継承、発展していくかということがございました。先ほど教育長が申したとおり、私も聞く中で、これから公民館、さまざまな地域課題はあるんですけど、やはり家庭教育支援、そういったところにもっと集中することによって、来年度に向けてまた財政当局もいろいろな形で説得いたしまして、発展させていきたいなと。また、皆様方の貴重な御意見の結果だということも含めて、強くアピールしていきたいなと、考えておりました。

○有馬委員 事務局サイドで補足したいことございませんですか。よろしいでしょうか。

○佐々木GL 補足説明をさせていただきます。交流事業の件ですが、大事なことを言い漏らしまして、来年度行う隠岐でのふるさと教育の実践交流事業ですが、私ども当然生涯学習課も力を出してまいります、学校からいろいろ情報をいただいたり協力願ったりということもありますので、義務教育課、それから各教育事務所にも御協力いただいて、一緒にやっっていこうということにしておりますので、つけ加えさせてください。

○寺井企画幹 青少年家庭課の寺井といいます。青少年家庭課では、青少年育成島根県民会議を持っております。今日の御意見にも、「日曜日にいろいろ事業するけども、中学生が参加しない」というのがありました。これにつきまして、今、第3日曜日は「しまね家庭の日」ということで県民会議が旗を振っております。県民会議で旗を振って、いろいろ事業展開してありますが、なかなか定着していません。でも、中体連にはお願いをして、日曜日には部活をしないとか、大会を持たない方向で協力をいただきましたので、中学生を呼べる機会にはなるのかなと思います。この第3日曜日をもっと県内に広めるために、いろいろな施設と手を結べないかなということは今、企画したり考えたりしておるところです。協力していただける団体等があると思いますので、またいろいろなことでお願いをしていきたいと思っております。どうか積極的に県民会議のしまね家庭の日を利用していただき

たいなと思います。

○有馬委員 今日公民館を中心にして御意見を賜るということでございましたけども、その周辺のいろいろな事業にかかわって、御意見が多数出たように思います。

私も公民館に、過去いろいろお邪魔させていただいたり、かかわりを持ったりしてきましたけども、だんだん公民館が担う任務が多岐にわたるし、膨らんできているが、職員はあまり増えないし、みたいなどころがあるように思います。ですから、今日、教育長もおっしゃったように、公民館は家庭教育を中心とする社会教育機能を持った施設であったわけですし、その原点に戻るべきだという、その質を高めるべきだという一つの考え方があると同時に、一方では、例えばですが、災害対策本部の機能を公民館が持つべきだみたい、付加価値が公民館についてきたために、一定の能力でたくさん抱え込むという流れの中にあるようです。従って、頑張っていらっしゃって、ありがたいことなんだけど、公民館をパンクさせないということも大事じゃないかなと思うぐらい、機能は多様化というか、多くなってきたと思うんですね。そういった中で、公民館のあり方というのは今後さまざまな要求を受けながらやっていかれないけないというところがあるんじゃないかなと思ってます。一応意見交換はこれで終わったということで、事務局にお返ししたいと思います。

○安達S L ありがとうございます。そうしますと、閉会ということで、藤原教育長から委員の皆様にお礼を申し上げます。

○藤原教育長 大抵の委員の皆さんには既に話したかと思いますが、私、福間さんと公民館協議会で一緒に意見交換した時に、公民館の話を書きました。先ほど有馬さんから話がありましたように、いろんな仕事を公民館はやってるんですね。今流に言いますと、地縁社会と目的縁のNPOとかとの結節点でもあるわけでありまして。「何とまるで千手観音のような仕事だな」と私言いました。公民館、千手観音というのを唱えながら、この「地域力」醸成の予算についても、溝口知事の新しい肉づけの予算の中で、これからのコミュニティーを守り、振興していくためには、ぜひともこの予算が必要だということで、額としてはそう大きな予算ではありませんが、県が社会教育、公民館の予算としては、初めてこういう予算化をしました。なぜかと言いますと、今まで公民館の仕事は市町村の仕事だから、県が余り口も出してもいけないと、口も出さんかわりに金も出さんということでやってきたわけでありまして、さまざまな話を聞く中で、この資源を使わない手はないということでスタートいたしました。さらに先ほどから議論いただき、ヒントを頂戴しましたよ

うに、家庭の教育力と、地域力、コミュニティーというのは、これはもう、絶対今後も公民館の一番大きな私は柱だと思ってます。さらにもう一本の柱を立てるとすれば、今、学校だけではなくて、家庭の教育力を高めることによって、さまざまな社会病理と言われるような教育課題について取り組んでいく「教育の場」にしていけないといけないということを改めて思いましたので、お礼にあわせて、今後そういう視点でまた御指導いただきたいと思っております。今日はありがとうございました。

○安達 S L 以上をもちまして、平成21年度第1回島根県社会教育委員の会を終了いたします。どうもありがとうございました。

島根県社会教育委員名簿

任期：平成20年6月24日から平成22年6月23日まで

(敬称略、50音順)

氏名	役職
赤水 照子	島根県連合婦人会長
有馬 毅一郎	島根大学名誉教授
小川 和邦	大田市教育委員会教育長
小村 孝志	島根県公立高等学校長協会副会長
狩野 由美子	島根県国公立幼稚園長会長
川神 裕司	島根県PTA連合会合同連絡協議会長
栗栖 真理	浜田のまちの縁側代表
坂本 和子	NPO法人しまね子どもセンター理事長
神 英雄	浜田市立石正美術館主任学芸員
高岡 信也	島根大学教育学部長
佃 稔	海士町教育委員会教育長
中島 直	島根県中学校長会副会長
仲野 寛	島根大学生涯学習教育研究センター教授
福間 敬明	島根県公民館連絡協議会長
堀川 照代	島根県立大学短期大学部教授
前島 泰	島根県社会教育委員連絡協議会副会長
増田 清子	公募委員
松本 英史	山陰中央新報社論説委員会委員長
横山 恵子	島根県小学校長会幹事
若菜 洋子	NPO法人らんぐ・ざーむ専務理事